

## 第 42 回クラシックを楽しむ会

2017 年 4 月 23 日 (日) 18:00～ (2 時間 26 分、休憩除く)

タイトル：歌劇「後宮からの誘拐」(モーツァルト)

会場等：バイエルン国立歌劇場 (ミュンヘン)

1980 年 4 月 25 日

楽団等：バイエルン国立歌劇場管弦楽団、同合唱団

指揮：カール・ベーム

演出：アウグスト・エファァーディング

出演：エディタ・グルベローヴァ (コンスタンツェ)

フランシスコ・アライサ (ベルモンテ)

レリ・グリスト (ブロンデ)

ノルベルト・オルト (ペドリルロ)

マルッティ・タルヴェラ (オスミン)

トマス・ホルツマン (太守セリム)

他



第 3 幕最終場、セリムの慈悲に感謝する二組の恋人達

### あらすじ

スペイン人の女性コンスタンツェは航海中に海賊に襲われ、2 人の召使と共にトルコの大守セリムに売られた。ベルモンテは太守の後宮に幽閉されている恋人コンスタンツェを救出に行く。しかし救出に失敗して 2 人の召使共々捕まってしまう。

### 余談

主人公の名前「コンスタンツェ」は日本語では「貞節」。モーツァルトの妻になる女性も偶然同じ名前。このオペラ作曲中、モーツァルトは可哀そうな境遇の彼女を「誘拐」する。彼女の母親からは結婚を迫られ、モーツァルトの父親からは恋愛に反対されながら作曲を続ける。オペラの初演が大成功し再演を続ける中で愛し合う二人は結婚式を挙げる。

### バイエルン国立歌劇場

ドイツのバイエルン州ミュンヘンにあるバイエルン国立歌劇場は、バイエルン選帝侯国の宮廷劇場が起源。選帝侯国は 1806 年王国に昇格し第 1 次世界大戦まで続いた。初代国王マクシミリアン 1 世の銅像が歌劇場前の広場に建っている。劇場名を直訳すると「バイエルン州立歌劇場」だが実態を踏まえて伝統的に「国立歌劇場」と訳されている。



バイエルン国立歌劇場

### 第 43 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「マノン・レスコー」(プッチーニ)

5 月 21 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

ミラノ・スカラ座の黄金時代を築いた巨匠リッカルド・ムーティの 1989 年の公演。魔性の美少女マノンに翻弄される騎士デ・グリユーの物語を、世界的ドラマティック・ソプラノ歌手のマリア・グレギーナとポスト・三大テノール

の旗手と謳われたホセ・クーラが熱唱。二人の見事な演技とリリアーナ・カヴァーニ演出の美しい舞台をお楽しみに。

6 月以降、「トゥーランドット」、「アンドレア・シェニエ」、「チャルダッシュの女王」など予定。

# あらすじ

## 【時と場所】

18世紀のトルコ。

## 【主要人物】

コンスタンツェ (ソプラノ)	スペイン貴族の女性
ベルモンテ (テノール)	コンスタンツェの恋人
ブロンデ (ソプラノ)	コンスタンツェの召使い
ペドリルロ (テノール)	ブロンデの恋人でベルモンテの従僕
オスミン (バス)	太守の後宮の番人、ブロンデに言い寄る
太守セリム (語り)	トルコの太守、コンスタンツェに結婚を迫る

## 【第1幕】海岸にある太守セリムの宮殿の前

海賊に捕えられ太守セリムに売られた恋人コンスタンツェを救出しようと、ベルモンテが太守セリムの宮殿の前にやってくる（アリア「ここで君に会えるはずだ」）。後宮の番人オスミンが庭にイチジクを摘みにやってくるが、ベルモンテを無視する（アリア「かわい子ちゃんを見つけたら」）。ベルモンテは召使ペドリルロの情報を聞き出そうと（二重唱「おまえの歌はもうたくさんだ」）するがオスミンは怒り出す（アリア「こういう風来坊の連中ときたら」）。ベルモンテはペドリルロと再会しコンスタンツェの無事を知って喜ぶ（アリア「コンスタンツェよ！君にまたあえるとは」）。

イエニチェリ\*の合唱（「偉大な太守をたたえよう」）に伴われ、セリムがコンスタンツェと登場する。コンスタンツェはセリムの求愛を拒む（アリア「ああ私は恋をして幸せでした」）。ペドリルロの勧めによって、セリムはベルモンテをイタリアの建築家として雇うがオスミンはベルモンテを王宮に入れようとし（三重唱「出て行け、消え失せろ！」）。

## 【第2幕】太守セリムの宮殿の庭

オスミンは女奴隷ブロンデに言い寄るが相手にされない（アリア「優しくして喜ばせて」、二重唱「行くよ、でもペドリルロはやめておけ」）。一方、コンスタンツェはセリムに回答を迫られるが（アリア「悲しみが私の宿命となった」）、コンスタンツェはセリムの脅迫に苦痛も死も恐れないと答える（アリア「どんな拷問が待っているよ」と）。

ペドリルロが現れブロンデに脱走計画を説明する。ブロンデはコンスタンツェに伝えようと大喜び（アリア「なんという喜び、なんという歓喜が私の胸に」）。ペドリルロは言葉巧みにオスミンに睡眠薬入りの酒を飲ませようとする（アリア「さあ戦いだ」、二重唱「ハッカス万歳！」）。この作戦は成功し、ベルモンテはコンスタンツェと再会する（四重唱「喜びの涙が流れるとき」）。ベルモンテとペドリルロは、コンスタンツェとブロンデの貞節を疑うが、誤解が解けて和解する（四重唱「ああベルモンテ、私の命」）。

## 【第3幕】太守セリムの宮殿の前の広場 夜更け

ベルモンテとペドリルロがはしごを持って庭にやってくる（ベルモンテのアリア「お前の力が頼りだ」、ペドリルロのロマンツェ「ムーア人の国に囚われ」）。ベルモンテはコンスタンツェを連れ出すことに成功するが、ペドリルロがブロンデと逃げ出そうとするときにオスミンに捕まる（アリア「ああ勝利だ」）。ベルモンテとコンスタンツェも衛兵に連行される。セリムはベルモンテが仇敵の息子であると知り、コンスタンツェも死を覚悟する（二重唱「何という運命だろう」）。しかし、意外にもセリムは憎しみに憎しみをもちて報いず、四人に帰国を許す（フィナーレ「ご恩は決して忘れません」）。残忍な処刑を楽しみにしていたオスミンは憤慨するが、イエニチェリ\*の合唱（「太守セリムよ、万歳！」）のなか、二組の恋人達は故郷に向かい旅立つ。

## 補足.

イエニチェリ（トルコ語で「新しい軍隊」の意）はオスマン軍の勇猛な親衛歩兵軍団のこと。その軍楽隊をメフテル（メフテルハーネとも）と呼ぶ。絢爛豪華な衣装に身を包み、戦場で大音響の勇壮な音楽を奏でて敵を威嚇し味方の士気を高めた。西欧の軍楽隊の起源であり、西洋音楽にも大きな影響を与えた。

## 主な出演者

**エディタ・グルペローヴァ**は1946年スロバキアのブラチスラヴァ生まれ。圧倒的な美声と驚異的な技巧を兼備したコロラトゥーラ・ソプラノ歌手で、当代を代表するベルカント歌手の一人でもある。



グルペローヴァ

**フランシスコ・アライサ**は1950年メキシコシティ生まれの現代を代表するテノール歌手の一人。現在は後進の指導といくつかの国際コンクールの審査員を務めている。



アライサ

**レリ・グリスト**は1932年ニューヨーク生まれのソプラノ歌手。コロラトゥーラ・ソプラノとして非常に高い音域を持つ。オペラ・デビュー前はミュージカル「カルメン・ジョーンズ」、「ウエスト・サイド物語」にも出演した。



レリ・グリスト

**ノルベルト・オルト**は1939年ドイツ・ドルトムント生まれのテノール歌手。ドイツ国内だけでなくパリ・オペラ座、メトロポリタン歌劇場など一流歌劇場で歌った。

**マルツィティ・タルヴェラ**(1935-1989)はフィンランド（現在はロシア連邦カレリア共和国）生まれの世界的に活躍したバス歌手。2mを超す身長と140kgの巨体！。若いころボクサーの訓練し、歌手になる前は小学校の教師を務め、死去の直前にはヘルシンキ国立歌劇場総監督に就任した。

**トマス・ホルツマン** (1927-2013)はドイツ・ミュンヘン生まれの舞台俳優、映画俳優。

**カール・ベーム** (1894-1981) はオーストリア・グラーツ生まれ。弁護士の父の意向で法律を学び法学博士に、同時に父が市立歌劇場の法律顧問を務めていた関係で個人教授に音楽を学んだ。ブルーノ・ワルターの手引きでバイエルン国立歌劇場の指揮者に就任。戦前はR.シュトラウスの2つの歌劇の初演を指揮し、ザルツブルク音楽祭にも出演した。戦後はウィーン国立歌劇場の音楽総監督、ウィーンフィル名誉指揮者を務めた。本公演翌年の死は世界に衝撃を与え、カラヤン、レヴァイン、ショルティ、カルロス・クライバーなどが追悼演奏会を開いた。ザルツブルク音楽祭会場には彼の名前を冠した大ホールがあり、グラーツ・ザルツブルク間には今もカール・ベーム号が走っている。



カール・ベーム

**アウグスト・エファージング** (1928-1999) はドイツのオペラ演出家、監督。バイエルン国立歌劇場を含むミュンヘンの州立劇場総監督を務めた。演出した作品はウィーン国立歌劇場、ザルツブルク音楽祭、ロイヤル・オペラ・ハウス、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場などで上演された。

## 作品誕生の背景など

### 作曲当時のモーツァルトについて

1781年、時の神聖ローマ皇帝ヨーゼフⅡ世\*1が、オスマン帝国（オスマントルコ）軍によるウィーン包囲（1683年）百周年を記念するためモーツァルトにドイツ語オペラの作曲を依頼した。モーツァルトは前年の1780年にザルツブルクのコロレド大司教\*2の命令でザルツブルクからウィーンに出てきたばかり。1781年春、大司教と大喧嘩してザルツブルク宮廷音楽家を辞職。引越し先の宿の娘コンスタンツェと親しくなる。娘の母親から結婚を迫られ、モーツァルトの父親から反対される中で依頼された歌劇「後宮からの誘拐」の作曲を続けた。皇帝がバックアップした1782年の初演は大成功。父親の同意を得られないなか、モーツァルトとコンスタンツェはシュテファン大聖堂（ハプスブルク家の墓所）で結婚式を挙げた。



ヨーゼフⅡ世(左)とコロレド大司教(右)

\*1. 神聖ローマ皇帝ヨーゼフⅡ世はマリアテレジアの長男、マリー・アントワネットの兄。啓蒙専制君主の代表的人物。

\*2. ザルツブルク大司教はローマ教皇庁の枢機卿とおなじ緋の衣を身にまとう身分。

## モーツァルトの青春時代

1777年、21歳のモーツァルトはザルツブルクのコロレド大司教に休職を申し出て、就職活動のため母を伴ってザルツブルクからパリに向けて旅に出た。旅の途中、父レオポルトの故郷アウグスブルクに立ち寄り、ピアノ製作者シュタインと親交を結んだほか、従兄弟のベーズレと「極めて親近な」交情をもった。次にマンハイムを訪れてヨーロッパ最高と謳われた宮廷楽団の**マンハイム楽派**の人々から大きな影響を受けた。このマンハイムでヴェーバー家のアロイジアに出会い初恋。後ろ髪を引かれる思いで1778年パリに向かう。パリで就職活動がうまくいかない中で母が亡くなる。傷心のモーツァルトは1779年パリからザルツブルクへの帰路、ミュンヘン（パリ滞在中にマンハイム宮廷がミュンヘンに移っていた）に立ち寄りアロイジアに再会するが失恋。ザルツブルクに帰郷して宮廷楽団に再任される。1780年には歌劇「クレタの王イドーメネオ」を作曲する。

1781年コロレド大司教の命令で、大司教の催す演奏会などのためウィーンに移る。大司教と決裂してウィーンに留まり、お抱え音楽師でなく自立した音楽家の道を目指す。

## モーツァルトとヴェーバー家の娘たち

マンハイムで知り合ったヴェーバー一家には4人の娘がいた。次女アロイジアがウィーンのドイツ・オペラと契約したため一家はウィーンに移住、未亡人となっていたヴェーバー夫人は宿の女主人。

長女ヨゼファはソプラノ歌手として活躍、モーツァルトの「魔笛」に出演して「夜の女王」を歌った。

次女アロイジアもソプラノ歌手でモーツァルト初恋の相手。夫ランゲは俳優でアマチュア画家。モーツァルトの肖像画を描いて名を遺した。

モーツァルトと結婚した三女コンスタンツェはモーツァルトの死後デンマークの外交官と再婚し、モーツァルトの遺品を夫と共に保護、モーツァルテウム設立にも関与した。「魔弾の射手」で有名なカール・マリア・フォン・ウェーバーの23歳年上の従姉でもある。

末娘ゾフィーは作曲家・歌手と結婚した。モーツァルトとコンスタンツェの結婚式に母とともに出席した。



コンスタンツェとモーツァルト、いずれもランゲ画

## トルコ風について

17世紀の終わりウィーンはオスマン帝国に16年間にわたり包囲されていた。オスマン帝国の軍楽隊は管楽器と太鼓、シンバルを打ち鳴らし舞いながら行進していた。当時、西洋には「行進曲」というカテゴリーがなく西洋音楽に大きな影響を与えた。リズムを強調して打楽器を前面に出す軍楽隊のリズムをトルコ風とし、モーツァルトは「後宮からの誘拐」に取り入れた。序曲\*と第1幕と第3幕の合唱をトルコ風に作曲したと父親あての手紙に書いている。第2幕の二重唱「バッカス万歳！」の後半も作曲中にトルコ風に行進している。



軍楽隊メヘテルの行進(部分) 1720年

\*手紙に「序曲はたった14小節しかなく一だからすごく短く一終始フォルテとピアノが交代し、フォルテではいつもトルコ音楽が入ります。一音のたびにいつも転調しますから、居眠りをする暇はないだろうと思っていますし」云々と書いている。

## 歌劇のタイトルについて

「後宮からの誘拐」の「誘拐」の代わりに「逃走」、「脱出」など様々な訳がある。原作台本の名称は「ベルモンテとコンスタンツェ、または、後宮からの誘拐」となっており、メインタイトルの主人公側の立場からは「逃走」、「脱出」などとなり、サブタイトルのトルコ側からみると「誘拐」となる。実際に第3幕でオスマンが大公に「ベルモンテがコンスタンツェを誘拐した」と報告する場面がある。